平成 30年　10月　26日

研修報告書

氏名：真里谷　奨

所属：札幌医科大学医学部　産婦人科学講座・遺伝医学

研修期間：平成30年10月1日　～　平成30年10月5日

研修場所： 東京女子医科大学遺伝子医療センター・ゲノム診療科

研修内容：

1週間のスケジュール（研修内容は別紙）

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
| 朝カンファレンス | 午前・午後陪席 | 午前・午後陪席 | 午前・午後陪席 | 午前NGS見学 |
| 午前・午後陪席 | 午後レクチャー | 新患カンファレンス | 午後レクチャー | 午後陪席 |
|  | 山本先生ラボ見学 |  | CVS検体処理 |  |
|  | 人類遺伝学会予演会 |  |  |  |

研修成果：

今回の研修を通じて、NGSDプロジェクトの到達目標である「難治性疾患を総合的にマネジメントできる医師」像についての理解が深まった。神経筋疾患を主体とした外来や遺伝カウンセリングの陪席を通じて、縦断的医療すなわち小児期から成人期までの見守り、が占めるウエートが自分の想像より遥かに重いことを実感することができた。

適切な遺伝学的検査の実施、遺伝カウンセリング、および遺伝子情報に基づく治療そのものがメインだと思っていたのだが、当然のことながら難治性疾患の患者様と長期的に向き合っていくことこそが最も時間を要する部分であり、また患者様のニーズであることを本質的に理解していなかったことを反省した。

自分の現在の立ち位置は基本的に周産期であり、十月十日の対応に全力を注ぐ。その後は基本的に小児科へのバトンタッチがなされるのだが、その先にも関わっていける医師になることがNGSDプロジェクトを終えた臨床遺伝専門医としての責任であると感じた。

おそらく、私は来期以後に周産期科の立場の中で、遺伝医学に特化した形での勤務を求められることになると思われる。NGSDを経たことで周産期遺伝診療体制に大きな変化が得られるのは間違いないと思うが、自分自身がどこまで手を広げられるのかも含め、今後のプランニングをしっかり行いたいと思った。

その他（感想・要望・反省点、等）：

医局玄関のセコムカードが無いため、毎度秘書さんや先生を呼び出して（2階から！）玄関を開けてもらうのがとても心苦しかったです。可能ならゲストカードなど御一考いただけますでしょうか。